

真剣に本音ぶつけ合い

映画ファンたちが3日間をかけ、短編映画をつくる「第12回しまね映画塾」が、松江市宍道町で開かれた。県内外から毎年150人以上が集い、映画づくりを通して地域や世代を超えて交流。映画への関心アップという期待にとどまらず、映画による地域おこしに乗り出した塾生も出始めた。出演者として現場に入り、熱気を体感した。

(文化生活部・石川麻衣)

「しまね映画塾」体験記

「本番行きます」。撮影初日、監督の大武英樹さん(38)益田市、自営業の声を夫道高校の教室に響き渡り、12人の撮影メンバーに緊張感が走った。

「目線はどうする?」どの方向を向いていいか、戸惑いが膨らんでいく。「せりふに抑揚をつけて」。監督から注文された。学生時代の先生はどんな話し方をしていったっけ? 必死に思い出す。

OKが出たのは5回目。「先生に見えたよ」。周囲の



映画塾で撮影に臨む記者(左)松江宍道町宍道、宍道高校

チャレンジ精神に熱い共感

温かい声に、ホッとしたり。映画塾(塾長・錦織良成映画監督)は、しまね文化振興財団などをつくる、しまね映画祭実行委員会が2003年から開催。これまでに県内11カ所を舞台に、台本や出演者、スタッフなどをすべて有志が担い、短編110本を製作した。

今年、今年のは976歳の75人。県内を中心に、九州や関西からも集まった。劇団員や脚本家を目指す若者、公務員など、横顔はさまざま。

「将来、何をしたいかはっきりしない」と悩み、「行動力を高めたい」と決意した深水英美さん(21)福岡市、福岡大学3年のように、初参加の人もいる。

ただ、3分の2は参加を繰り返すリピーター。9回目の人もいた。寝食を共にし、撮影アングルやせりふの意味、さらにそれぞれの夢や悩みを語り合い、絆を強めていく雰囲気、心を引きつけるのだと感じた。

塾が町おこしの起爆剤になった地域もある。昨年の舞台となった益田市では、スタッフとして参加した益田商工会議所のメンバーが中心となり、一館もなくなった映画館の灯をともそうと、具体策を模索している。

同商議所職員の三浦康広さん(40)は「高津川を題材にし、

た映画を、錦織塾長に撮ってほしい。その機運を高めるため、市民が映画を楽しめる環境をつくりたい」と思いの丈を話す。

安来市では、映画愛好者グループ「やすぎ名画シアター(仲佐伸夫代表)」が過去に2回、映画塾を誘致。これをきっかけに12年、戦国時代の武將山中鹿介を題材にした映画「おもひびな」を別の地元グループと連携して自主製作し、地元イベントで上映して郷土の偉人を市民に伝えている。

「作品を作るため、みんなが真剣に本音でぶつかり合う。すべてのものづくりや地域の行事にも通じる、大切なことだ」。最終日の座学で、錦織塾長(52)が塾生に熱く語り掛けた。

「3日間、本気で取り組んだ。みんな一つのものをつくる難しさ、喜びを知った」。初参加の深水さんが笑みを浮かべた。「同感。また参加したい」。記者のチャレンジ精神も、刺激された。